

# 行政情報

Administrative Information

#02

## 北海道の新たなライフスタイル「夏山冬里のすすめ」 北海道における冬期集住・夏期滞在モデル調査

北海道開発局開発監理部開発調査課

北海道開発局開発監理部開発調査課は、北海道総合開発計画の企画・立案、推進のために必要な調査の一つとして、平成18、19年度に「北海道における冬期集住・夏期滞在モデル調査」を実施しました。

調査を行う背景として、北海道の農山漁村では人口減少・高齢化の進行等の課題がある上に、全国平均と比べてみても高齢化が進んでおり、さらに高齢者世帯でも単身世帯・夫婦のみ世帯の割合が高い状況となっています。

また、隣の家に回覧板を持って行くにも自動車で、というほど家屋間の距離があります。こうした散居型の集落形態では、特に冬期間は日常生活の不都合が生じて更なる過疎化の原因にもなりかねないと考えられます。

### 冬期間に不便を感じているところ等 (高齢者世帯)

回答	割合	不便である内容	割合
不便を感じている	65.3%	除雪・排雪が大変である	93.1%
		家の中に閉じこもりがちになり暇	23.1%
		人に接する機会がなく寂しい	16.3%
		健康状態が悪くなり通院・入院	13.3%
		その他	6.6%
不便を感じていない	34.7%		

「介護保険に関する道民意向調査」(1998年北海道保健福祉部調べ)

一方、都市における人口増加に伴う生活条件の低下に起因して、北海道に対する潜在的なニーズ、即ち、夏期間の避暑や農業体験など農山漁村での生活へのニーズが増加しているものと考えています。

北海道の農山漁村に集まる2つの視点(農山漁村の利便性向上とスローライフ的なスペース提供)に応えるため、一つの居住スペースに冬期間は地元住民が集住し、夏期間は都市住民が滞在(=完全な移住には至らない状態)する新たなライフスタイルの可能性について報告します。

### 首都圏等からの北海道への移住に関する意識

北海道に住んでみたい	10%
北海道に一時的に住んでみたい	65.3%
どちらともいえない・住んでみたくない	51%
(夏季だけなど) 季節限定であれば住んでもよい	28%
(3年だけなど) 期間限定であれば住んでもよい	3%

\*首都圏等居住の50~60歳男女1万人対象に調査  
平成17年3月31日 北海道知事政策部調べ

## 1 冬期集住の可能性

本調査では農村部の高齢者を対象に冬期間だけ自宅を離れて市街地に集まって暮らす「冬期集住」に関する意向調査と実際に1カ月以上の期間にわたって自宅を離れて市街地の集住施設で暮らす実験（以下、「集住実験」と言います。）を行っています。前述のように農村部に住んでいる高齢者は冬期間の生活に不便を感じている人が多くなっています。内容としては除雪・排雪作業が負担となっている、家に閉じこもりがちになるあるいは人に接する機会が減少する、というようなものです。

今回の調査で農村部に住んでいる高齢者に冬期集住の希望があるかどうか等について聞き取りを行いました。この結果、身の回りのことを自分でできるうちは自宅に住み続けたいが、身体に不調な部分が出てきたときには冬期集住も考えられるという意識が見て取れました。また、冬期集住をするとしても、自宅になるべく近い場所を希望する高齢者が多く、便利だからといって完全に市街地に集住するという判断にはなりにくいようです。

冬期集住は単に生活の拠点を移すことに留まらず、集住をしている高齢者どうしが交流したり、若い世代（子どもを含む）との交流を求める意見もありました。

一方、冬期集住に踏み切れない理由としては、留守宅の心配や冬期集住に要する費用負担など現実的な課題が挙げられます。

### 【農村部の高齢者が望む冬期集住施設の概要】

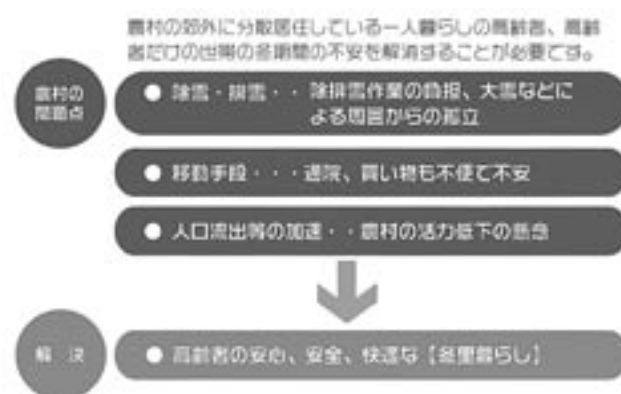
#### ① 住居の広さ

単身者の場合は1DK（30㎡程度）から1LDK（36㎡程度）、2人以上の場合は2LDK（60㎡程度）を希望する傾向があります。集住実験を通じて、例えば夫婦であってもお互いに趣味などに没頭したいというような希望から、別々の部屋が必要だという意見もありました。

#### ② 住戸の設備

生活する上で必要な基本的な什器類は備え付けとし、施設はバリアフリー仕様（段差解消・手摺り設置等）にするほか、設備の機能は必ずしも多機能である必要はなく、基本的な性能を備えていればよいようです。集住実験では、操作が難解で暖房のスイッチを入れることができなかったというような意見も聞かれました。

## 冬期集住



#### ③ 共同設備

共同利用の設備としては食堂と大浴場についての要望が多く聞かれました。例えば、食事のメニューや量は高齢者に合わせたり、大浴場を設置する場合には利用時間をあまり限定しないなど、個々の好みや生活習慣が変わらないように設定するとよいようです。

#### ④ 施設内外の交流

冬期集住している期間は単調な生活にならないよう交流メニュー（カラオケ大会や映画鑑賞等）を用意したり、居住者の家族が宿泊できるゲストルームや、友人・知人と気軽に過ごせる談話室があるとよいようです。逆に集住実験に参加した人からは、他人との行き来が重荷になるという意見も聞かれました。ほどよい距離感が必要とされるのかもしれませんが。

#### ⑤ 立地条件

高齢者にとっては日常生活の移動手段が限定されるため、医療機関や商業施設などの施設が徒歩圏内にあること、公共交通機関を使用することを想定してJRの駅やバスターミナル・停留所に近いことが望まれています。

#### ⑥ 留守宅の管理について

今回の調査では、集住実験を行っており、実際に1カ月以上にわたって留守宅の状況を監視しました。この結果、防犯上はWebカメラの設置により侵入者に備えることが可能であることがわかりました。また、家屋に積雪があっても住宅本体に構造上の影響は認められませんでした。

しかしながら、一定期間にわたって自宅を留守にすることに違いはないので、昔から言われていることですが、普段からのご近所どうしの声の掛け合いなどにより一層安心できるようです。

## 2 夏期滞在の可能性

都市住民の北海道に対する期待はどのようなものでしょうか。本調査ではホテルや旅館の協力を得て、実際に北海道を訪れて宿泊施設を利用した人に対してアンケート調査を実施しました。回収されたサンプルは700ですが、これを回答者の年齢別に10代～20代をジュニア世代、30代～40代を子育て世代、50代以上をシニア世代として分析しました。

この結果、世代間に大きな相違がなく都市住民のニーズはある程度まとまりがあることがわかりました。

この分析を裏付けるため、インターネットを使って全国の3000人からのアンケートを行いました。やはり大きな相違は見られませんでした。

さらに実際に北海道内で夏の一時期間を過ごす実験（以下「滞在実験」と言います。）を行って、どのような生活を送ったのか、それに要した費用はどの程度のものであったのかというような情報を把握することができました。

### ① 滞在時期及び期間

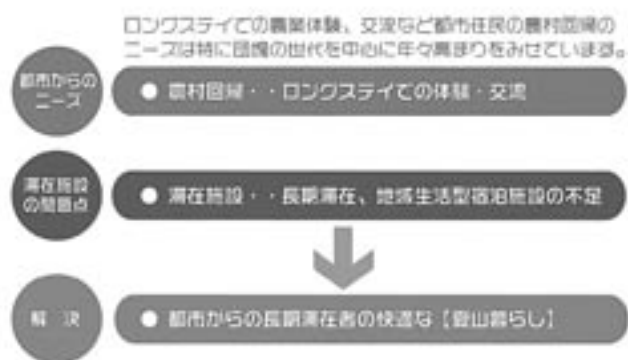
滞在時期については、「夏」という意見で共通しています。理由としては「本州の暑さを避けたい」「涼しいから」「梅雨が無い」などといった「本州よりも過ごしやすい気候であること」が挙げられています。

滞在期間の希望については、アンケート調査では「1～2週間以内」という希望がもっとも多くなっていますが、滞在実験に参加した人の意見は「1ヵ月以上」という希望が多くなりました。無作為のアンケートとは違って、滞在実験に参加した人は、自ら時間を管理できる立場にあるという属性を持っている比較的時間にゆとりがある年齢や職種を持っていたことが要因として挙げられます。

### ② 滞在時条件

滞在時条件をアンケート調査と滞在実験で比較すると共通している条件は「自家用車・レンタカー」でした。「車がないと移動が厳しい」、「北海道は車社会、車が必要」などといった滞在実験への参加者ならではの意見が聞かれました。アンケート調査で上位に挙げられた「住居」、「生活費」については、滞在実験に参加した人からは意見が出てきませんでした。アンケート調査は「実際に滞在していない人」の意見、滞在実験参加者は「実際に滞在した人」の意見という区別で考えると「実際に滞在した人」にとっては「住居」と

## 夏期滞在



「生活費」は確保されているので問題にはならなかったと考えられます。

都市住民に夏期滞在を行うことを決心させる条件としては「住居」と「生活費」は非常に大きな意味を持ちますが、滞在が始まってしまえば「滞在中に必要な道具」に関心が移ると考えられます。

また、滞在実験に参加した人の意見には「地域の人を知る、交流する」、「街を知る」、「体験をする」といったようなことを必要と考えており、これらを組み合わせたものが滞在中の基本的な要望を構成する要素になっているようです。

### ③ 住居タイプ

住居タイプについては、アンケート調査では「マンション」、「ホテル・旅館」といった要望に集約されましたが、滞在実験に参加した人は「マンション」と答えた方が半数となりました。滞在実験に参加した人は滞在実験に使用した住居タイプを希望のタイプとして回答する傾向にあり、希望する住居タイプについては新たに施設を作る場合は「マンションのような集合住宅」が有力ですが、特にこだわる必要はないと思われます。

### ④ 部屋数

部屋数については、滞在時の人数にもよりますが、リビングのほかに2部屋あれば十分であると考えられます。滞在実験を行ってみると実験に使用した施設に対して「2人では広すぎる」、「3部屋の内1部屋は何も使わなかった」、「部屋数よりも間取りをゆったり」などといった意見が聞かれ、各部屋の広さについては、リビングダイニングが「8～10畳程度」、寝室などが「6畳」といった希望が聞かれました。

### ⑤ 住居条件

滞在実験に使用した施設は、アンケート調査で把握

した条件をほぼ満たしていたため、特別な意見が聞かれませんでした。また、「備品付」という条件については準備したすべての滞在施設においてこの条件は満たされていましたが、それでもなお「必要である」という要望が多いことから滞在施設には、ある程度の生活必需品が備わっている必要性が示されたと言えると考えられます。

### 3 まとめ

2年間にわたって北海道の農村部に居住する高齢者と北海道内外の都市住民を対象にして「住」をテーマに調査を行ってきました。北海道の夏は本州に比べて気温も湿度も低く快適であり、都市住民が季節限定で過ごす動機は十分に備わっていると考えられます。逆に北海道の冬は積雪があり、気温も低く高齢者の日常生活は不便を強いられると言いうことができると思います。

しかし、「住む場所」としての北海道の魅力は全国各地、どんな世代からも評価されており、その橋渡しがうまくいけば交流人口が増えて地方経済の活性化等の果実を得ることができる可能性があります。

交流人口は待っていても増えるというものではありませんが、既存の枠組みを少し工夫することによって郊外に存在する市町村の魅力が増して都市住民を引きつけることも可能ではないかと思えます。

一方で、一人暮らしや高齢者夫婦だけで構成される世帯でも、冬期間だけに限定しても住環境を変えてみることによって新しい仲間や趣味をもてる可能性があり、外からの刺激によって生活にメリハリができる可能性があります。

限られた資源を有効に使う方法としての冬期集住・夏期滞在（夏山冬里）は生活という極めてプライベートなテーマではありますが、1年間に2世帯が使用するとすれば2毛作的な効果が得られるのではないかと思います。

そうした取組でできた北海道と本州の都市住民のつながりは、都市住民が自宅に戻ってから友人知人に口コミで広まったり、北海道の物産を購入する動機として目に見えない効果も発生させるものになると考えています。

このほか、仮に冬期集住を集落ぐるみで実施する地域が出てくれば、当該集落につながる市町村道の除排雪を軽減することも視野に入ってきます。冬期集住・夏期滞在施設を整備することに費用はかかりますが、長い目で見たときに行政コストの削減という効果が現れる可能性を秘めているとも考えられます。冬期集住は高齢者世帯の安心な生活の一形態になりうるとともに、遠隔地に住んでいる高齢者の子ども世代の安心にもつながるのではないのでしょうか。

## 北海道における新たなライフスタイル

